『教育じほう』一九六四年十一月（東京都新教育研究会）

能力開発と学校教育

矢口　新

一　永遠の課題・能力開発

歴史とか時代の移りかわりとかというものはふしぎなものである。一つの言葉を改めて考え直させるというような力をもっているものであるらしい。能力開発などということが言われだしてきたが、そういうことが過去に考えられていなかったかというとそんなことはない。その証拠に、これまでの教育は能力を開発することを考えていなかったなどというと、教育者からきついおしかりを受けるであろう。いつの時代に、人間の能力をのばすことを考えないで教育をやってきたであろうか。江戸時代であろうが、明治時代であろうが、大正時代であろうが、能力を開発することを考えてきたのである。それにもかかわらず、今改めてこういうことを言い出すのは、考えてみるとふしぎなことである。

しかし現在、能力開発というようなことが特に言われなければならないのは、過去の時代において、その言葉が使われ位置づいて来たのとちがったものがあるからなのであろう。何かちがったことを指示しようとしているのであろう。それは何であるかを探し求めることがさし当って大切なことなのであろう。それはただ言葉としての能力を定義するなどということとはちがうのである。その言葉で現代が指示しようとしているものは何か、ということなのである。

言葉というものは、いつも内容がはっきりとしているとは限らない。一体何をさしているのかわからないことが多い。能力という言葉もそうであろう。人は勝手にそれはこうだときめることはできる。しかし人によってそれが違うのである。だから多くの人が物を言えば言うほど、ますます混乱してくることにもなるのである。それでは何もならないかのごとくであるが、しかしそうとも限らない。それもやがてまたある所へまとまっていくのである。それはどうしてかというと、実践というのがそれをきめてくるのである。さまざまな考え方にもとづいて、さまざまな実践が行われる。そのさまざまな実践の中からあるものが残り、あるものは消えていく。そうして残ったものがその言葉を独占する資格をとるのである。能力開発などということも最後にはそうして、おさまる所へおさまるのであろう。そうしてある時代の動きが終わる。そうするとまた次の時代が始まるのであろう。その意味では、能力とは何かなどという問は永遠になくならない問だと言えよう。

二　現代教育の理念と現実

私は能力とか、学力とか、あるいはもう少し幅広くして才能とかいろいろな言葉で言われているものを、あまり厳密に言葉の上で定義す

るという立場をとらない。少し乱暴な言い方をすればどうでもよいことだと考えている。しかしそうかといって、全然でたらめでよいとは考えていない。常識の所で出発すればよいということである。今この論もそこから進めよう。必要に応じて多少ずつ限定をしていくことになるかも知れない。それは現実の問題を考える必要に応じてということである。

能力を開発しなくてはならないといわれだしたが、過去においてもそうだったのに、どうして特にまたそう言われるようになったのであろうか。現代の教育が能力の開発という点から見て、どこかに欠陥があるのであろうか。そうでなければそういうことが特に言われだす必要はないと思う。

現代の学校教育が能力の開発という点から見て、どこかに欠陥をもっているであろうかという問を改めて出してみて、さてこれを考えるとなると、なかなかことは重大であり、むつかしいことである。これもごく常識的な所から考えてみる。このごろは毎年学力調査をやっている。学力というのも能力の一つであろう。調査によってのびたとかのびないとか、あるいは高いとか低いとかを問題にしているが、それはやはり、能力をのばすことを考えてやっていることなのであろう。学校は学力開発あるいは能力開発を一生懸命やっているのである。それでよいではないか。それとは別になにか別なことをやらなくてならないというようなことがあるのであろうか。いな別にというより問題があるとすれば、その学力を開発しようとしているそこのところに問題があると考えるのがよいのではないか。つまりわれわれが今やっているそのことについての検討をするということである。そこから手がかりを求めてだんだん進んで行くという態度がよいのではないか。その最も具体的な実践にも実はさまざまな考え方が背後にあって、なかなか簡単には検討できないのかもしれない。しかしまたそれだからこそ、一層そういうことが大切だとも言えるのである。

さてここで、私は学生時代に教育学を勉強したはじめに、エデュケートというのは、引き出すということだ、能力をのばすことであって、押しつけることではないのだということを、いつもいつも言われたのを思い出す。近代の教育学はどれもみなそういう考え方をとっているから、われわれの現在もっている教育は、そういう根本的な思想をもとにして成り立っていると考えてよいのであろう。つまり能力を開発するという考え方は、現代の教育の根本的な性格であるはずだということになる。

やっていることと考えていることは必ずしも一致しないのはわれわれの常であるから、問題があるとすればどうもその辺であろう。現代われわれのものとなっている教育の体系というか、組織構造というか、それが必ずしも能力を開発するというようなものとなっていないのではないか。考え方と実践との間に、気のつかない隔たりがあるのではないか。

三　教育目標観の問題—わかるとできる

そういう点で私がもっとも問題点だと思うのは、現代の教育の目標観である。現代教育の目標で中心をしめるのは、理解ということである。何といっても理解させるということは教育の中心の目標になっている。理解の道を通じて態度を養うし、技能を養うというようになっている。もちろんそうでない途もあるが、理解ということが現代の教

育において占める位置、比重は大へんに重いのである。

これをもっとひらたくいえば、わかるということであり、教師の側から言えばわからせるということである。ごく常識的にどうしてわからせてやるかというような言い方をして、教育のことをいろいろと考えているのである。それが日常の実践となってあらわれて来るのである。

このことが、教育が本当に能力を開発することにならない大きい原因ではないだろうか。と言っては結論が早すぎるが、これには多少の説明が必要である。

「わかったか、よくおぼえておけ」というのは教師のよく使う言葉であるが、この言葉にあらわれているのは、わかるというのは教師の説明を聞いてわかったと思うことなのである。わかったことはよくおぼえておけといわれるのであるが、どうしたらよくおぼえられるのかは教師は教えてくれない。おぼえることを命令されるのである。命令といって悪ければ勧告されるのであるが、さてどうしたらおぼえられるのか、おぼえますといったからといって、おぼえられるものではない。おぼえるつもりでも忘れてしまうのである。そこのところは教師の責任ではなく学習者の責任なのであろうか。

学習者が一度教師に聞いてわかったことを忘れないようにしようとするためには、多分あとでくりかえし反復してみる必要があるであろう。そうして自分だけで教師が説明したすじを語ることができるようになったらそれはもう忘れないであろう。そこの所に学習者の能力が開発される秘密があるのである。つまり教師がわかったかと問いを出すまでのその前の説明の段階は、あまり生徒にとっては役にたたないのである。言いかえれば、教師が手とり足とりして、やっと生徒を歩かせたという段階である。それを一回やってやっと歩けたというのが、わかったという状態なのである。それであとおぼえておけと放り出してしまうのは、いちばん大切な所を何もしないのと同じである。一度歩いてみて歩けたら、今度は教師の援助なしにひとりで歩けるように努力するところにいちばん大切な能力の開発があるのである。自分で歩ける能力をつけてやるところが教育のいちばん大切な仕事なのである。それをやらないのは、教育はわからせればよいのだという考え方が、いつのまにやら身についてしまっているからである。

わかるでなくて、できるようにしてやることが教育だということを、一度はっきりと確認しなくてはいけないのではないか。

四　人間観・能力観のあやまり

わからせる教育という考え方は、人間の能力を考える意識をいつのまにか失わせてしまっている。学習者ができるように力をつけるという所に、教育の大切な仕事があることを忘れさせてしまっている。

教育は外から与えるものになる。教師はわかっていることを説明することに浮身をやつす。そうしてわかったか、わかったらおぼえておけとくりかえすだけなのである。そこから先にたいへん努力が必要であるし、時間もかかるのであるが、それは学習者にまかせられるから、教師の関係することではないかのごとき錯覚をもつにいたる。そういう体系で教育が考えられると、教えることがいくらでもどんどんふくれあがる。教育の内容は無限にふくれてくる。あれもこれもとわからせようとする。実はわかったと思わせるだけなのである。本当に自分でひとり歩きできるようになったのではない。ただそのときの授業でわかったと思わせるだけでよいことになる。それが教育内容を知らず

知らずのうちに過剰にしていく。生徒はそれにおしつぶされそうになってくる。教育内容は過密になってもうどうにもならない。これでどうして人間が能力を開発することになろうか。人間は過剰ないわゆる知識というものを、何とか頭とういれものの中に入れようと努力するのである。それはしかし、食べものをろくにかまないでのみこんでしまうようなもので、不消化のまま通過するだけである。

わかったかわからないかをテストする試験があるけれども、これも本当に生徒ができるようになっているかどうかをみるものにはなっていない。一学期に二回ぐらいテストがあると、それに合わせて生徒は、不消化なものを暗記するのである。そうして試験が終われば忘れるのである。それでよいことになっている。その中から幾らかは残っていくものがあろうというのが今の教育である。

今のような教育だと、人間の能力というのは、いれものの大きさのようなものと考えられているといってもよい。それも試験のときどれだけはいっているかというだけのことである。それは生まれつき大体決まっているのであって、能力のあるものはよくおぼえている、能力のないものはおぼえていないということになる。できる生徒、できない生徒などというが、それは試験にできるということであって、本当にできるということを問題にしているのでない。

特に生徒をできるようにしてやるという考え方がないのである。教師は自分の知っていることを説明する。能力のある生徒はそれについて来るし、能力のない生徒はそれについて来ないのだと考える。

こうして能力というのも、開発すべきものという考え方では考えられなくなってしまっている。能力のあるなしははじめからきまっていて、教師は教育するときは能力のある生徒を教育したいと考えるようになる。能力の低いものは教育しないでよいというように考えるのである。恐るべき人間観である。非人間的な考え方が教師の中に知らず知らず生まれてきているのである。

五　正しい能力観

能力というのは、どれだけ頭を働かすかによってきまってくるのである。いまあることに能力が低いというのは、そういう訓練を過去に受けなかったからで、つまり頭を働かさなかったからなのである。教師はあれだけ教えてやったのに、できないのは能力が低いからだなどという言い方をする。それは教えたかもしれないが、できるようにすることをしなかったのである。わかったと思わせたにすぎないのである。わかったと思うなどということはピンからキリまである。長い話のちょっとした所がわかってもわかったであり、段階はさまざまである。それはあてにならない。実際に自分でやってみてはじめて本当にわかるのである。やってみるとひとりひとりがみんなちがったスピードをもっているのである。早くやるものもおればゆっくりやるものもいる。それはまたやることに関して、過去にどれだけのことをやったことがあるかということと関係するのである。つまり能力というのは過去にやったことの函数と考えたらよい。ただ話を聞かせて分かったと思わせるということは、能力をのばしたことにならないのである。遊ばせていたことにしかならないというべきであろう。

やらせればやらせるほど能力はのびるのである。いかにして頭を働かせるか、わきからの助けなしで自分で歩けるようにするか、それが能力をのばすについていちばん考えられなければならぬことである。

それはわからせることでなく、わからせたことを、自分でできるようにするまで、どうもっていくかを考えることになる。はじめは多くのヒント、援助を与えてわかるであろう。それをヒントなしで援助なしでできるようにする所まで教育するのが能力の開発である。

こう考えてくると、現代の教育は能力の開発をするという考え方が乏しいということは、間違いのないことのようである。そうしてそれがさまざまな所に悪い影響を及ぼしている。教育における非人間的な考え方がでてくるのも、これと関係があるのである。教育内容が過密になって、生徒をむやみに圧迫するのも、本質的に教育の仕事である人間能力の開発ということを忘れているからである。受験準備の教育というような怪しげなものが横行するのも、やはり人間能力の開発を忘れているからである。そういうことが、やがて大きな復しゅうをうけることになることを忘れてはならない。さらに新しい技術革新の時代に生きる人間の教育という要請からも、これまでのような考え方では失格ということになるであろう。

六　学校教育の新しいヴィジョン

以上、能力開発とは、具体的に、現代教育の何を批判し、何をそれに対して要請しているかを考えて来た。これは必ずしもわが国だけの問題でなく、広く世界的な教育問題だといってもよいのである。いわば近代教育が、新しく当面した課題である。あるいは二十一世紀への教育をつくりあげる跳躍台だといってもよいと思う。そういう意味では本格的なとり組み方をする必要があるのである。

最近アメリカのＮＥＡという教育団体（これは日本の教育会と教員組合を一しょにしたようなもの、指導主事も教育長も教育学者もみなはいっている大きな団体である）が一九六〇年代のプロジェクトを発表した。全部で十二の領域にわたって三十三の勧告をだしているが、具体的な学校経営の領域に関して、かなり思い切った提案をしている。

その一つに学年制のない学校制度をつくる必要があるということがある。これは現在わが国では夢のような提案と思われるかもしれない。しかしよく考えてみると、能力を開発するということを真剣に考えてくると、当然そこへ帰着するのである。しかし近代教育の歴史としては長い伝統を持つ現代の学年制の学校をのりこえるということは、なかなかむつかしい事であろう。しかしそれをあえて提案する所になみなみならぬＮＥＡの覚悟がうかがわれるのである。それだけの覚悟がなければ、真に能力開発ということが実現できないのだということを、われわれも深く考えてみる必要があるのではないか。

本当にできるようにしてやるには、ひとりひとりのペースに従って、独自の学習をさせなければならないことになる。といってそれは寺子屋の昔にもどることではない。ひとりひとりが歩くコースはできている、つまりカリキュラム、プログラムができているのである。このコースを生徒はまずひとりで歩くのである。それを助けるものはティーチング・マシンであり、プログラムド・テキストである。あるいはさらにさまざまな技術を利用した施設設備がある。教師はそういう生徒の学習をひとりひとりについて診断し、ひとりひとりがどのような進み方をしたらよいかを指示する。すべての者が、同じ教科を同じようにやらなくてはならぬということはない。最も適切な時に、適切な教材を使って能力を開発すればよいのである。そういうことをアドバイスするのが教師なのである。

このようにして教育とは、ひとりひとりをフルに活動させるようにするためのエンジニアリングと考えられなければならない。

いままでの小学校ではひとりの担任教師が学級を受けもって学級王国をつくっている。生徒はひとりの教師の手のひらにのって身動きができなくなっている。しかも日本では五十人という大勢の生徒がひとりの教師だけを相手にして、何年もの間生活するのである。そのようなことで、すべての能力をどうして診断し、それぞれの生徒の所有しているものをどうしてのばしてやることができようか。

といって中学校や高等学校では、教科担任制であって、ひとりの教師は一つの教科を通して以外、生徒をみていない。担任がいてもそれは一つの形式にすぎない。多くの先生の採点を合計するのがその仕事だったりするのはナンセンスでしかない。ここにもひとりひとりの生徒をみて、それぞれがいかなるコースを歩くべきかを診断し、指導する教師はいないのである。現在の中学で、それを誰かひとりの担任教師にまかせるというようなことでは到底できないことでもある。こうなると、学級の編成の仕方、その生徒をいかなる方法で指導し、診断するかということは、大きな問題となるであろう。カウンセリングの問題もこれまでとはちがった意味で、根本的に考えられなければならなくなってくる。

ここまで考えてくると、能力開発というのは現在われわれのもっている教育観や教育方法観の延長の上に成り立つことではなさそうである。一つの大きな飛躍が必要なのではないか。といってその飛躍が今すぐできることではない。かなり時間のかかることである。時間がかかるということはしかし、座して待つということではない。やはりわれわれの一歩一歩の積みあげの努力が必要なのである。それは一体どのようなことであるのだろうか。

七　転換への努力を

今差し当って学校がなすべきことはどういうことであろうか。ひとりひとりの能力をのばすということを、まず真剣に考えるべきであろう。ひとりひとりの能力をのばすにはひとりひとりにこつこととやらせなくてはならぬ。それはいっせいに教師が学級を動かしているだけではだめなのである。そうすれば学級の少数しか働かしてはいないことになる。多くのものが遊んでいることになる。だから一人一人になすべきことを与えなければならない。

たとえばピアノの教則本のことを考えてみたらよい。ひとりひとりがピアノに向かって、教則本に従って能力を訓練しているのである。そこで力がつくのである。そういうものをひとりひとりに与えなくてはならぬ。教則本をひとりひとりがやり出したらそのペースはちがってくる。みないっせいに進むというわけにはいかない。能力を開発することになったらどうしてもそうなるのである。早い遅いが出てくるのはやむを得ないことである。おそくともちゃんとやればやった所までは能力がつくのである。その方がいっせいに進むよりも能力をつけているのだと考えるべきである。先へ進んだものはどんどん先へ進んでもよいのである。

これはこれまでの考え方からすると、大変ぐあいの悪いことになるであろう。しかしそれを克服できなければ、能力開発などということがそもそもできないのである。ただ現在の制度ではどんどん先へ進むものができて具合がわるかったら、進んだものは何か別のことをやら

しておけばよい。それも一時的のことで、やがてそれはばかばかしいことだということがわかってくる。それがはっきりしてくればやがて学年制の問題も考えることになるのである。まずやってみなくては学年制の問題も出てこないのである。その点ではアメリカがすでにそういうことを問題としてとりあげているのは、かなり実践的な研究が進んでいるのである。そういう国があることを忘れてはならない。

次に大切なことは、わからせるということでなく、できるようにするということを教育の本筋として考えるということである。これを定着というように考えてもよい。数学などは比較的わからせるよりは、練習の方に重きを置いているが、その他の教科でも皆同様である。社会でも理科でもそうである。教師の指導する授業でわかったかというのでなく、考え方を身につけて、自分で社会や自然をみることができるように練習をさせることに重点をおくべきである。そういう教育になると、教科書や教材の点でさまざまな不便が起ってくるであろう。当然そのはずである。一般には教科書が今のようであっては、とてもそういうような教育に変わり得ないという人が多い。しかしその教科書は誰が変えるのか。それは多くの教師の実践によって、わからせる教育でなく、できるようにする教育のための教材のあり方が明らかにされてから、教科書も変わるのである。

つまり教師の実践が根底にあって、教科書も変わる方向にむいていくのである。世の中が変わるとは、そういう実践によって変わるのである。その努力を怠るものはけっきょく敗者の道を歩かなければならないのである。

こういう努力は言いかえれば、今の教科書をもとにして、プログラム化された教科書、生徒の頭脳を訓練する教科書、生徒自らがやって、自ら発見していき、しかもそれを繰り返し練習をするという教科書の形に切りかえる努力をすることである。教科書をワークブックの形に切りかえることだといってもよいかも知れない。それは大変なことであっても、少しずつでもしなければならない。そうでなければ、生徒の能力を働かす場を設けることにならない。それが少しずつでもできてくると、また新しい教師の仕事が見えてくるであろう。それが生徒の能力を開発する方向に一歩近づくのである。千里の道も一歩よりはじめるしかないのである。

（国立教育研究所員）